

ラジオNIKKEI ■放送 毎週水曜日 21:00~21:15

小児科診療 UP-to-DATE

2015年9月16日放送

小児における必要な性感染症の知識

安元皮膚科クリニック
院長 安元 慎一郎

性感染症とは、性行為における密接な接触によって伝播する感染症の一群をさします病原体は細菌、真菌、ウイルスなど多岐にわたり、その症状にも多様性があります。性的な活動に入って間もない中高生においては、予防に関する知識が少ないために感染に対して無防備な状態におちいりやすいと考えられます。よって、性感染症に関する正確な知識を持つことは重要です。

皮膚科の専門医と実地医家の多くが参加している組織として日本臨床皮膚科医会という法人があります。この医会の中に学校保健委員会という委員会があり、そこで、皮膚科医を中心とする医師が、中学校や高等学校で生徒、学生に対して性感染症について講義形式でお話する機会があった場合に使用できる資料をまとめることになり、私がお手伝いをすることになりました。昨年完成した資料は中高生に必要な性感染症の知識というタイトルで、数十枚のスライドとそれぞれのスライドについての解説でできおり、原案を私が作成し日本臨床皮膚科医会の学校保健委員会委員会で内容に検討を加え、CD化して配布できるようにし、また、ウェブサイトにも公開されています。

さて、性感染症の専門家からは、若年者の性感染症への対策として、一般へ性感染症の知識を普及させることが最も重要で、あり、そのためには社会環境の整備、子供と大



人への性教育、学校教育における性教育の整備が必要と指摘されています。今回の資料集は学校教育における性教育に利用することを目的に作成されており、性感染症の種類、いくつかの代表的な疾患の症状と感染に伴うリスク、かかった時に必要な検査と治療、かからないようにするための予防法などがまとめられています。扱われている疾患は、梅毒、淋病性器クラミディア感染症、HIV感染症、

性器ヘルペス、ヒト乳頭腫ウイルス感染症などです。ここの疾患については、その資料集を一度ご覧になっていただくとよいと思います。ただし、実際の臨床像は、中高生への講義に使用することを考えに入れて、ほとんど収録していません。

この資料集を作るときには、中高生が持つておくに役に立つ性感染症の知識としてはどのような内容が必要か、さらにその知識をこの資料集を使って生徒、学生に伝えるための講義をする医師側の情報にはどのようなものが必要かについていろいろと調査し、考えながら作成を進める必要がありました。本日は中高生に向かって性感染症の解説をする医師、さらには中高生の性感染症の診療をする医師が踏まえておくべきいくつかのポイントについて解説したいと思います。

中高生をめぐる性的な環境は時代と社会情勢を背景に常に変化しています。以前から性交渉を初めて経験する年齢、いわゆる初交年齢の低下があると言われており、また、インターネットが身近になり、ソーシャルネットワークの発展などから、友人関係や出会いのかたちは様々で、援助交際やJKビジネスなどは社会問題になっています。しかしながら、このような環境には地域差があり、大都市と地方では遊びの場所や異性と出会う機会の多寡、さらには性感染症に感染するようリスクの有無にも違いがあります。医師として、自分が診療している地域の現状を知ることは重要です。代表的な性感染所については感染症法によるサーベイランスが実施されており、毎月の症例数や地域別の登録症例数などが国立感染症研究所のホームページで閲覧できますので、診療の合間にでも、その地域の動静を見ておくと、役に立つと思います。

いわゆる性教育の実施状況や教師と保護者の性教育に対する意識にも学校や地域で大きな違いがあるのが現状のようです。日本性感染症学会や思春期学会からは、幼稚園、小学校から中学、高校にかけて、年代別に教えていくべき項目が整理された教育カリキュラムが提案されていま

中高生への性感染症講演を依頼されたときのチェックポイント

- 中学生か高校生か？
- 学校のある地域はどこか？、地域の社会状況は？
- 安全な性と性感染症に関するカリキュラムが施行されているか？
- どのような立場での講演か？
- 学校関係者(保健の先生など)、保護者および生徒、学生との良好な関係を構築、維持できるか？

中高生と性感染症

- 性交初体験年齢は低下している。
- 一人あたりの性交相手の数が増えている。
- 社会環境が常に変化し、いろいろな情報が錯綜している。(JKビジネス、出会い系SNS、援交、性的マイノリティなど)
- 思春期の性感染症は増加しつつある。
- 性感染症に罹った時に、学校関係者(保健の先生など)、保護者およびパートナーとの良好な関係を構築、維持することが難しい。

す。男の子と女の子はどう違うのかから始まり、ヒトの性的活動、妊娠と出産、さらには望まれない妊娠と性感染症という性行為に伴うリスクについて、一貫した性教育を行うように推奨していますが、実際にこのようなカリキュラムに従って実施されているかどうかについては様々です。学校に出かけて行って性感染症の講義をするとき、さらには、性感染症が心配な生徒、学生の相談に乗ったりする場合には、その学校の教育の現状と教師や保護者の理解は十分かどうかをチェックする必要があります。

保護者や学校関係者との関係は実際に性感染症に罹ってしまった学生生徒を診療する場合にも重要です。性感染症の疑いがある、あるいは性感染症と診断できた場合、付き添ってきている保護者あるいは学校関係者に診断とこれから必要な検査、治療の内容、その費用についてどこまで説明するのか、患者の学生生徒本人には自己決定権がありますが、多くは未成年であると考えられるので、費用負担の面からも保護者等の理解も必要です。本人と保護者は個別に説明するのか、本人と同席で説明するのかなどを判断しなければなりません。また、性感染症の広がり防止するためには、パートナーに関する情報を問診で確認し、一緒に治療することが重要です。日本性感染症学会からは性感染症診断・治療ガイドラインが発行されています。そこには思春期の性感染症診療について

若年者の性感染症(STI)の対策

- 性感染症(STI)の知識を普及させる
- コンドームの常用
- 子供と大人への性教育
- 学校教育(性教育)の整備
- 社会環境の整備
- STIの予防ワクチン

川名 尚 Mebio 24(1): 22-7, 2007 引用改変

の項目もあり、これらを参考に診察を進めるとよいと思います。性感染症の診療では、患者の臨床症状からこの症例はひょっとすると性感染症ではないだろうか?と疑うことがもっとも重要です。疑って検査をしないと見過ごしてしまうことがあるからで、このことは、現状の社会情勢を考えると、小児であっても、さらには中高生についても、常に頭に入れておくべきだと思われます。

最後に、性感染症の対策として中学高校の生徒、学生に伝えておきたいことをまとめておきます。第一に、性感染症に無防備な状態にならないように予防の知識を持ってもらうことです。それには、不特定多数との性行為をしないなどのいわゆるSafer Sexの意識を持つのが重要と考えます。性感染症の予防にはコンドームの常用が昔から推奨されてきました。中高生に常用してもらうのはなかなか難しい状況もあるかと思いますが、多くのエビデンスもあり、これからも予防の基本となることは間違いありません。一方、性感染症の予防ワクチンが新しい戦略として、その開発、普及が待たれています。現在のところ子宮頸がんワクチンとして、ヒト乳頭腫ウイルスに対するワクチンがあり、定期接種となっていますが、本邦では予期せぬ副反応があり、実施状況は停滞しています。淋菌やクラミジア、単純ヘルペスウイルスとHIVなどに関してもワクチン開発の努力が続けられていますが、実際に使用できるまでにはまだ時間が必要です。

第2には、中高生が自分は感染しているのかどうか気になった場合に、病院、保健所などで検査を受けてすぐに確認することができるように、性感染症に関する十分な知識を持ってもらうことが重要です。

第3は、感染していたらきちんとパートナーと共に治療をする重要性を理解してよいにしたいものです。

第4に信頼性のない情報、すなわちネットのサイト、雑誌や口コミなどですが、これらに振り回されないで、相談できる友人関係、保護者、先生との関係を日常から構築する努力をしてもらうことなどがあげられます。

以上、中高生の時期、いわゆる思春期に持ってほしい性感染症の知識について、その診療、指導をする医師の立場からお話ししました。

性感染症の対策として伝えたいこと

- ・ 予防することが一番重要。
 - ・ 性行為(セックス)をしないことも予防の一つ
 - ・ コンドームを使用する(男性)
 - ・ 子宮頸がんワクチンを接種する(女性)
- ・ 感染しているのか気になったら確認する。
 - ・ 病院、保健所などで検査を受ける。
- ・ 感染していたらきちんと治療をする。
 - ・ パートナーと共に治療すること。
 - ・ 保護者、先生に相談できる？
- ・ 信頼性のない情報(雑誌や口コミ)に振り回されない。

「小児科診療 UP-to-DATE」

<http://medical.radionikkei.jp/uptodate/>